



# 筑紫女学園大学リポジト

## Determiners and Category Types

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/108">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/108</a>

# 限定詞とカテゴリータイプ

緒 方 隆 文

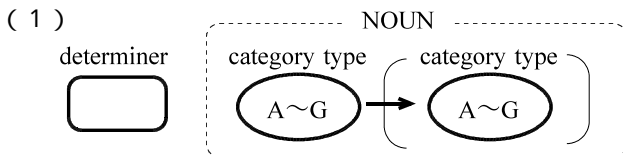
## Determiners and Category Types

Takafumi OGATA

### 1. はじめに

名詞はそれが持つ意味に加え、主観的な見方に強く左右される。主観的な見方の一つに、カテゴリータイプがあると本稿は考える。カテゴリータイプはあくまで主観的なものであるが、名詞の属性に方向付けを与え、数の一致、呼応などいろいろな影響をもたらす。このカテゴリータイプを通して、名詞と限定詞の関係を説明することが本稿の目的である。

カテゴリータイプは、本稿では7種類 (type A~G) 設定する\*1。この7種のカテゴリータイプは一つにとどまることもあれば、他のタイプへと推移し、複数のタイプの属性を兼ねる場合もある。限定詞と名詞の関係を、こうした推移も含めたカテゴリータイプの観点から見ていく。そして限定詞こそが、名詞とカテゴリータイプとの関係を規定すると主張していく\*2\*3。

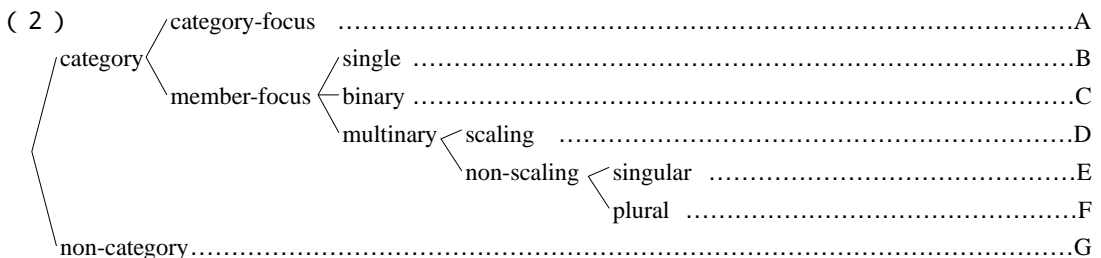


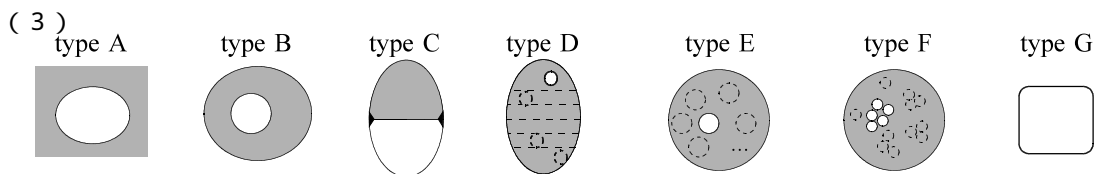
以下、まずカテゴリータイプとその推移を2節で見る。そしてこのカテゴリータイプを通して、3節でまず冠詞を考察し、4節で all などの数量詞を取り上げていく。限定詞は、通例複数のタイプに付加し多様なため、最後に一覧表を提示することとする。

### 2. カテゴリータイプ

#### 2.1 カテゴリータイプ

本稿で考えるカテゴリータイプは(2)に示すように全部で type A~G まで7種類あり、各々のタイプを図示したものが(3)である(cf. 緒方 2010)\*4。楕円はカテゴリーを、楕円の中にある小円は成員を表す。白い部分に焦点があたっており、灰色は背景化された部分になる。





名詞はまずカテゴリーと関連があるかないかで分けられる。カテゴリーは属性によってまとめられた集合体なので、属性により規定されていれば、カテゴリータイプ(type A~F)になる。一方 Japan, John などは対象と名前が直接結びついており、属性と関係なく規定される。これらは非カテゴリータイプ(G)に属する。

カテゴリータイプはさらに、背景化の種類・成員の数・カテゴリーの特性・焦点の成員数という4つの観点で分類される。まず背景化であるが、人は物事を認知するとき、そのまま認知するのではなく、あるものは前景化しあるものは背景化しながら認知する。カテゴリーにおいても背景化は重要である。背景化することでカテゴリーの境界が定まったり、焦点があたる成員または部分が定まるからである。カテゴリータイプにおいては、2種類の背景化がある。一つめは他カテゴリーを背景化することで、カテゴリー全体を前景化する。カテゴリー全体に焦点があたるので、中の成員は主観的に見えない。カテゴリーの外を背景化するので外部背景化と呼ぶ。(2)では category-focus:(type A)がこれに相当し、抽象名詞の一般的用法などがここに入る。二つめはカテゴリー内部で背景化がおこる。他成員/他部分を背景化することで、一部の成員/部分のみが前景化される。カテゴリー内部を背景化するので内部背景化と呼ぶ。(2)では member-focus:(type B~F)になる。

member-focus はさらに、成員の数によって分かれる。この数はあくまで主観的な見方においての数になる。1つであれば type B、2つであれば type C、3つ以上であれば type D~F となる。

さらに成員が3つ以上の場合、カテゴリーの特性(カテゴリーに尺度があるかないか)で分けられる。尺度があれば、type D、なければ type E, F になる。プロトタイプ効果を考えると、すべてのカテゴリーには何らかの尺度があると考えられるが、顕在的な尺度があると主観的に見なされるとき scaling type(type D)になる。non-scaling type はさらに、焦点があたる成員の個数によって分けられる。1個であれば type E、複数個であれば type F になる。

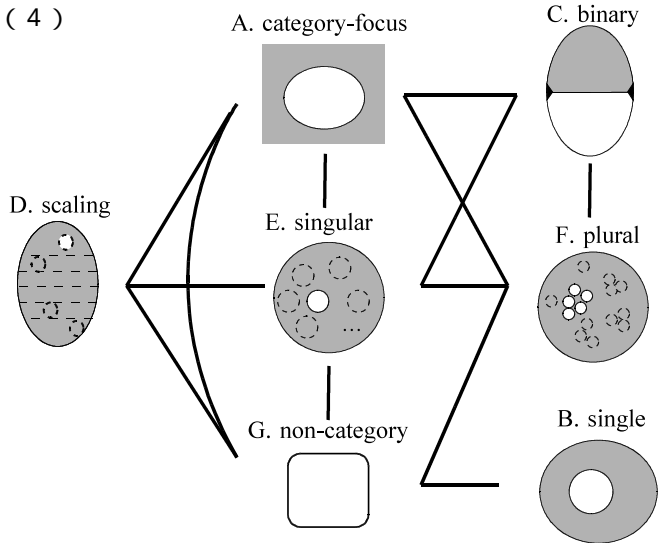
## 2.2 カテゴリータイプの推移

前節でカテゴリータイプを概観したが、名詞は一つのカテゴリーに必ずしもとどまらない。すなわち複数のタイプの特性を兼ねることがある。それでもいずれかの type に軸足を置いていることから、本稿ではこれを推移と呼び、type X から type Y へ推移すると表現する。推移は複数の type の特性を持つ。一方基本となる type X から変化したが、type X の特性を失って type Y となった場合、特性は一つの type しかない。これを type X から type Y へと転化したと表現し、推移と区別する。

この推移/転化には方向性があり、ある程度制約がある(cf. 緒方 2010)。それを示したものが、(4)になる<sup>\*5</sup>。中心的なカテゴリーは type A, E, G で、type B, C を除いて他のすべての type とつながる。周辺的な type B, C, D, F は、type A, E, G またはその一部とつながる。太い実線を通り推移が起こるが、つながるからといって必ずしも双方向ではない。また推移では複数 type の特性を同じ程度兼ねることもあるが、どちらかに重点が置かれることもある。例えば the United States では type

[F G]の推移が起こっている。type (4)

Fの特性により States が複数形になっているが、type Gの特性により動詞の呼応は単数である。そのためtype Gの特性が優位に立っている。この場合Gに'の符号をつけ、type [F 'G]の推移として、以下表記していくこととする。



### 3 . 冠詞(a/an, the ,ゼロ冠詞)

限定詞の中から冠詞を、不定冠詞(a/an)、定冠詞(the)、ゼロ冠詞の順で見えていく。冠詞はカテゴリーと密接な関連を持ち、特定のカテゴリータイプまたは推移に付加する。

#### 3 .1 不定冠詞(a/an)

不定冠詞(a/an)は、カテゴリーの複数成員(2つ以上)から任意に選ばれた1つに付加する。そのため推移なしではtype C, Eに付加する。type Cでは2つの成員から、type Eでは3つ以上の成員から任意の1つが選ばれる。type Dもカテゴリーから1つが選ばれるが、尺度上に並んでいるため任意という意味合いが薄れるため、不定冠詞は付加しない。

(5) a. I could lift them with *a hand*. (type C)

b. They have never seen *a tiger* in the wild.(type E)

一方推移する場合、type Eを基本とする。すなわちtype Eが起点となるが(type ['E A]) 着点になるが(type [A/D/G E])になる。起点のtype ['E A]は、1成員から広がり類全体に及ぶ総称用法になる(以下、総称1)(6)の斜字体名詞にはspecificityがなく、カテゴリー(類)全体にあてはまる叙述となっている(斜字体は筆者)。任意の1つが選ばれるが、これが順次別のもので入れ替わるため、結果すべての成員にあてはまる総称用法となる。焦点はあくまで一つ一つの成員におかれるため、type Eに'が付与される(type ['E A])。

(6) a. *A German* is a good musician. b. *A tiger* can be dangerous. (Quirk, et al 1985: 265)

一方着点となる場合、次のような例がある((7): A E, (8): D E, (9): G E)。(7)は抽象名詞・物質名詞がタイプAからEに推移した例で、カテゴリーから切り離されたものがタイプEの成員となっている\*6。(8)はfirst, secondなどの序数が単なる属性を示しているだけで、もはや尺度が薄れてしまいtype Eへと推移している。(9)は元々は固有名詞であるものが、名前、作品・製品、雑誌、氏などの属性を持つ成員の集合となり、その中から任意の一つがに選び出されている。

(7) a. They will have *a tea* instead of a dinner.

b. There is *a beauty* of Switzerland. - Mark Twain, *Following the Equator*.

- ( 8 ) a. He feared *a first cry* of alarm. - Stendhal ( C. Slater 訳 ) *The red and the black*.  
 b. I am only *a second wife*! - Ernest Poole, *His second wife*.
- ( 9 ) a. a Mr. Gibson, a Dr. Cambray, etc.  
 b. a Sony, a Toyota; a Times, etc.

まとめると不定冠詞は type E を基本とし、推移であれば type E を起点とする総称 1、type E を着点とする推移に分けられる。それに加え type C は成員数が 2 つではあるが、任意の一つを選ぶことから type E と同様、不定冠詞が付加する。

### 3.2 定冠詞(the)

定冠詞は付加する type も推移も多岐にわたるが、基本 2 種類に大きく分けられる。一つは切り離しの the、もう一つは対比の the になる。切り離しの the とは、カテゴリーの他の成員から切り離し特定する用法になる。別の言い方をすれば、他を強く背景化し対象を浮かび上がらせ特定する。一方対比の the とは、カテゴリー内の他成員と対比しながら、対象をより前景化し特定する用法となる。両者の違いは、つまるところ他者をどれくらい強く背景化するかの違いになる。他者を強く背景化すれば、対象のみが切り離された形となり、弱く背景化されれば他者との比較となる。以下 2 つに分けて見ていく。

まず切り離しの the は推移なしであれば、type A/B/E/F に付加する。type A はカテゴリーの中の成員が見えないため、カテゴリーそのものから切り取り特定する( type A : ( 10a ) )。名詞が持つ属性の集合から、切り取られる以外の部分が背景化され特定される。一方 type B/E/F であれば、他成員 / 他部分が背景化される( type B : ( 10b ) ; E : ( 10c ) ; F : ( 10d ) )。もっと言えば、切り離しの the は、前景化される対象の境界をはっきりさせることにある。そのため type A のようにもともと境界がない / はっきりしない場合、切り離しの the をつける必要があるし、type B/E/F の場合特定するには他成員 / 他部分を背景化することで切り離す必要がある。そのため切り離しの the が付加される。

- ( 10 ) a. *The water* was about knee deep.  
 b. the sun, the moon, the president, the weather, tell the truth, etc.  
 c. *The boy* stopped from time to time.  
 d. He returned *the books* he borrowed.

次に推移では、切り離しの the は type [ A F ] に付加する。waters がその例で通例 F に焦点があるが、A に焦点があれば単数扱い( 11a )、F に焦点があれば複数扱いとなる( 11b )。

- ( 11 ) a. The waters is divided into several narrow channels.  
 b. The waters were used by bathing and drinking.

ここでも切り離しの the は、境界を明確にするために付加する。複数成員の集合では、どの成員まで入るのか、その境界線がはっきりしない。そのため切り離しの the を付加し境界を定めて、はじめて集合体として自立する。

また type F から type A への推移がある。一つめは、集合体に強く焦点があたり単数呼応となる( 12 )のような例がある( type [ F 'A ] )。 ( 12a ) は語源的に複数起因のもの、 ( 12b ) は病気、 ( 12c ) は

ゲーム類などになる( cf . 久野・高見 2009: 18 25 )。二つめは、動詞が複数呼応する clothes, goods, troops, woods, oats といった語がある( type [ 'F A ] )。( 13 )がその例で、複数成員( タイプ F )が、ゆるやかな集合体( タイプ A )を構成しているため、複数呼応となる。

- ( 12 ) a. the news, etc.  
b. the measles, the hives, the shingles, etc.  
c. the cards, the checkers, etc.

- ( 13 ) a. *The clothes* are clean.  
b. *The goods* are exported from Japan.

切り離しの the が付加する次の推移として、固有名詞が 2 種類ある。1 つめは成員の中から切り離され固有名詞となる。切り離しの the が、type F/E/B から type G への推移に付加する( 以下、固有名詞 1 )。まず type F から推移するものに、( 14 )のような例がある。切り離しの the が付加することで、名詞の意味( 属性 )を保持したまま、複数成員が切り離され固有名詞となる。( 11 )と同様、複数成員がどこまで入るのか、境界を定めるために、切り離しの the が用いられる。

- ( 14 ) the United States of America, the Netherlands, the West Indies, etc.

動詞の呼応は、type [ 'F G ] ( type F に焦点 )だと複数呼応になり、type [ F 'G ] ( type G に焦点 )だと単数呼応になる。

- ( 15 ) a. The West Indies are washed by an ocean so transparent. - Fraser, *Ebb and flow*.  
b. The West Indies is part of South America. - C. Glyn, *Love and joy in the Mabilion*.

次に type E から推移する場合、( 16 )のように普通名詞を前置詞句等で修飾することにより特定し、固有名詞化する。ここでは成員の中から、前置詞句で限定することにより成員を特定し、切り離す作業がなされている<sup>\*7\*8</sup>。

- ( 16 ) the University of Oxford, the Gulf of Mexico, the Lake of Como, etc.

最後に type B から推移する場合、主観的に一つしかないものが、カテゴリーから切り離され固有名詞化する用法がある。

- ( 17 ) the Earth, the Pope, the Equator, etc.

ただし対象が他から切り離す必要がないほど、自立したものと感じられれば、切り離しの the は不要となり、Earth, Pope のようにゼロ冠詞になることもある。

2 つめの種類の固有名詞は、ゲシュタルト性が関与する。固有名詞化するには、固有名詞として自立できなければならず、強いゲシュタルト性が要求される。単にカテゴリーの成員として成立する以上に、明確な境界が必要になる。ところが Hewsor( 1972: 109 )が指摘するように、( 18 )のような名詞は外部の境界が明瞭でない。固有名詞となるための十分なゲシュタルト性がないため、切り離しの the が必要となる。付加することで、ゲシュタルト性を高め固有名詞化できる( 以下、固有名詞 2 )。( 19 )のように type E の成員の境界を明確にすることで G への推移が可能となる( type [ E G ] )<sup>\*9</sup>。

- ( 18 ) ocean, sea, river, canal, isthmus, peninsula, gulf

- ( 19 ) the Japan Sea, the Indian Ocean, the Mississippi River, the Panama Canal, etc.

一方(20)のような名詞は外部との境界が、(18)に比べてはっきりしている(cf. Hewson 1972: 109)。そのため切り離しの the を付加する必要がない(以下、固有名詞3)。the が付加しなくとも、固有名詞として自立できる。固有名詞2と同様、type [E G]の推移が起こっているが、(21)のように切り離しの the はつかない。

(20) street, avenue, square, road, place, crescent, bridge, mount, cape, lake, island, county, parish, point, bay, park

(21) Lake Biwa, Mount Fuji, Hyde Park, Oxford Street, London Bridge, etc.

また認知度が高くなり、個別性が強くなると、切り離しの the がとれていくことがある。これは主観的にゲシュタルト性が強くなったためと考えられる。「あの」という風に特定できるようになるからである((22)は Quirk, et al. 1985: 294)。

(22) (i) the Oxford road (ii) the Oxford Road (iii) Oxford Road (iv) Oxford

一方対比の the であるが、推移なしでは type C、D に付加する。type C の場合 2 つしか成員がないので、常に他者が意識される。そのため対比の the が付加する。一方 type D では尺度が意識されるため、単なる成員の集合ではなく、各成員は互いの対比の中でなりたっている。そのため切り離しの the ではなく、対比の the が付加する。

(23) a. She puts *the hand* through *the arm* of her husband.

b. *The first sentence* is one of the longest in the passage.

対比の the の推移にはまず、type [A E/F] がある。属性が、その属性を持つ成員の集合へと変化し、その中で主観的に一番 prominent な成員が他と対比されることで選ばれる。prominent な成員として、サブカテゴリーが選ばれれば type F への推移、一つの成員が選ばれれば type E への推移となる。抽象名詞 type A が(24)では人々(type F)を、(25)では個人(type E)を表している。

(24) the youth, the nobility, the audience, the acquaintance, etc.

(25) Who is the beauty of the ball?

また type [E/G A] の推移もある。もともと type E/G に属するものが、他カテゴリーの属性との対比において、その名詞固有の属性を表すようになる。

(26) The scholar respected *the scholar* in her. (type [E A])

(27) Their papers have much of *the Newton* in them. (type [G A])

次に成員が尺度の中に組み込まれる推移がある。推移 type [A/E/G D] がそれで、カテゴリー成員の中で一番 prominent なものが選ばれる。対比の the が付加することで、他成員と対比が起こり、いわば典型的な成員が特定される。

(28) a. She had *the beauty* of a beauty. (type [A D])

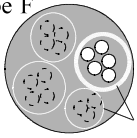
b. The speaker was quite *the gentleman*. (type [E D])

c. This isn't *the London* I used to know. (Berry 1993: 65) (type [G D])

さらに推移には、総称用法がある。複数成員を擁するサブカテゴリーが単一体となり、互いを対比しながら総称用法となる(以下、総称2)。複数成員が単一体となることから、type [F A]の推移がおこっている。(30)ではハンガリー人とロシア人が各々、まとまった集合体として、他のサブカ

テゴリーと対比されながら総称用法となっている。

(29) type F



(30) The Hungarians fought alone and were crushed by the Russians.

(正保 1996: 148)

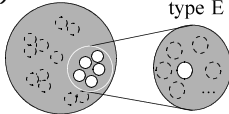
さらに対比の the にも、固有名詞の用法がある。対比の the が付加し、type E が type G へと推移する(以下、固有名詞 4)。カテゴリー内で特定可能な、主観的に一番 prominent な成員が選ばれ定冠詞が付加する。他者と対比することで、その中で別格の成員が固有名詞化する\*<sup>10</sup>。

(31) the Castle, the Cabinet, the Bank of England, etc.

主観的に 1 つ選ばれることで type B と似ているが、type B では他の成員が全く意識されないのに対して、固有名詞 4 では他の成員が意識される。また類例として、名詞と関連する集合の中から、一番 prominent な成員が選ばれる場合がある。例えば the Kremlin は、クレムリン宮殿を表すことができる。

最後に切り離しと対比の両方が働く the が存在する。(32)のようにカテゴリーからサブカテゴリーを切り離し、取り出したサブカテゴリーの中で他成員と対比する。これには総称用法と固有名詞がある。まず総称用法で、サブカテゴリー内の他成員と対比する。このとき type F E の推移がおこる(以下、総称 3)。(33a)では左右、(33b)では季節、(33c)では各国の夫というサブカテゴリーの中で、互いの成員が対比され、選ばれた成員が総称用法となっている。

(32) type F



(33) a. They must go to *the right*.

b. It is cool in *the summer* and warm in *the winter*.

c. *The French husband* is willing to help with the dishes.

次に固有名詞の用法では、サブカテゴリーを切り離しその中で、一つの成員を特定する(以下、固有名詞 5)。(34a)では新旧世界というサブカテゴリー、(34b)では資本主義陣営・社会主義陣営・途上国というサブカテゴリーの中で、各々他と対比されながら特定が行われている。

(34) a. the New [the Old] World                      b. the Third World, etc.

定冠詞はつまるところ、カテゴリーの中の成員を特定することにあるが、他成員を強く意識するかないかで用法が分かれる。意識しなければ切り離しの the、意識すれば対比の the になる。

### 3.3 ゼロ冠詞

ゼロ冠詞は、type G と A を基本とする。そのためこの 2 つに分けて見ていく。まず type G であるが、推移しない場合と推移する場合がある。推移なしの固有名詞は、ゼロ冠詞が type G に付加する Japan, London, Mars のような名詞がある(以下、固有名詞 6)。type G はカテゴリーとは関係がないため、冠詞 the によって切り取ったり対比することはない。よってゼロ冠詞が付加する。

推移する場合は、3.2 節で述べた固有名詞 3 がある。ゲシュタルト性が強いので、切り離しの the を付加せず、ゼロ冠詞が付加する。推移は type [E G] になる。

同様に type A も、推移なしと推移ありがある。推移なしの type A に付加する場合、カテゴリー全体を表す総称用法となる(以下、総称 4)。type A はもともとカテゴリー全体をさす type なので、



個々の成員というよりはカテゴリー全体から見た総称用法となる。なおカテゴリーは(35b)のようにサブカテゴリーの場合もある。

(35) a. Knowledge is power.                      b. Good wine needs no bush.

一方推移する場合、type A が着点となる。すなわちゼロ冠詞は、推移の type [ E/F/G A ] に付加する。最初に type [ E A ] では、もともと形あるものが、もとの形をなくした(36)のような例がある ((36)は Huddleston and Pullum 2002: 337)。

(36) a. We're having *salmon* for dinner.                      b. There was *cat* all over the driveway.

次に type [ 'F A ] であるが、これは成員から類全体に及ぶ総称用法になる(以下、総称 5)。 (37) では、名詞に specificity がなくカテゴリー全体にあてはまる叙述がなされている。そのため総称 1 と同じことがおこり、総称用法となる。ここでも全体 (type A) ではなく、複数成員に焦点がより強くあたる (F に ' が付与)。

(37) Whales are not fish, they are mammals.

総称用法ではないが、集合的に用いられる clothes, goods, troops 等も同様に type [ 'F A ] の推移でゼロ冠詞が付加する。これも複数成員が、ゆるやかな集合体を構成するからである。

(38) Goods are for the United States person's own use.    - *Code of Federal Regulations*.

最後に type [ G A ] であるが、これは属性について述べるもので、(39)のような例が相当する。他と区別できるような属性を意味する。この type [ G A ] の用法は、否定で使われることも多く no が付加する場合にこの用法になったりする。

(39) a. He has *Homer* in his view.                      b. He has *Cicero* in mind.

## 4. 数量詞

数量詞は冠詞と比べ、数量詞そのものがカテゴリータイプに強く特徴付けられている。そのため名詞と組み合わせるとき、数量詞の方からの影響も大きい。共起するしないとといった共起制限だけでなく、主観の見方 (カテゴリータイプ) さえも変えてしまうことが起こる。以下、all, every, each, both, half, either, neither, some とカテゴリータイプの関係を具体的に見ていく。

### 4.1 全成員 (both, each, every, all)

カテゴリー内の全成員を述べるものに、both, each, every, all がある。しかしその性格はかなり異なり、付加するカテゴリータイプも異なる。以下比較しながら個別に見ていく。

まず both は、成員が2つのカテゴリータイプを前提とする。しかし推移なしで type C に付加することはなく、推移ありの type [ C A ] にのみ付加する。というのも both はすべての成員2つ (集合全体) が同じ真理値をもつことを述べるため、成員2つをまとめる過程が必要になる。よって type C から一つにまとまる type A への推移がおこり、成員両方に焦点があたる。

(40) a. Both parents are equally important for their children.

b. Both of the men are well-educated.

both は type A へと推移するが、あくまで個々の成員がはっきりして個別である。そのため(41a)のように個性がなくなれば非文となる。一方(41b, c)は個別であるため適格となる。

(41) a. \*John and Bill both met in New York.

b. John and Bill both live alone.

c. The cup and the saucer both cost 50 ¢ apiece. (Dougherty 1970: 868-70)

次に each は、成員が2つ以上のカテゴリタイプを前提とする。そのため推移なしの type C と E に付加する。each はあくまで個々の成員への言及に終始する。そのため推移ありに付加しない。ではなぜ推移しない each が全成員の意味を持つかということ、総称1と同じ過程が起こるからである。選ばれる1つが順次別のもと入れ替わり、その結果全ての成員への言及となるからと考えられる。

(42) a. He carried a bottle in each hand. (type C)

b. The children in each class are divided into two groups. (type E)

一方 every は、2つの点で each とは異なる。1つめの違いは、every は成員が3つ以上のカテゴリタイプを前提とする。そのため推移なしでは、type E のみに付加する<sup>\*11</sup>。

(43) Every soldier must carry out the instructions of his superior officer.

2つめの違いは、every は推移ありに付加する。every と each はどちらも個に言及しているが、every のみがさらに全体に言及できる。個々の成員への言及に加え、全体にも焦点があたる。個と全体の複数焦点を持つことから、type E から type A への推移に付加することが分かる。(44)では全体がまとまっている感があるため、every のみが適格となる。

(44) Every/??Each of them rose at that moment. (Vendler 1967: 78)

しかしながら every はあくまで type E (個体レベル)の焦点が優先されるため、all のように type A に強く重点を置く用法はない<sup>\*12</sup>。

次に all であるが、all は何かの全体・総計を述べるときに用いられる。複数のものが一つ(全体)にまとまる過程がそこにある。カテゴリタイプでいえば、type F から type A への推移が要求される。このとき推移元(type F)に重点を置くか、推移先(type A)に重点を置くかで2タイプがある<sup>\*13</sup>。

まず推移元に重点をおく場合(type [F A])、all は複数可算名詞(タイプ F)のみに付加する。各成員に重点が置かれたまま、type A へと推移する(45)。

(45) All the students are required to attend public worship at the church.

一方推移先に重点を置く場合(type [F A])、複数可算名詞(type F)(46a)と不可算名詞(type A)(46b)の両方に付加できる。複数可算名詞(type F)に付加する場合、まとまりに重きが置かれているので単数呼応となる。そのため(45)の type [F A]とは異なることが分かる。次に不可算名詞(type A)は本来成員が見えない type であるが、all が付加することにより変容がおこる。具体的には部分のあつまりと見なされ、複数部分からの単一化と見なされる(46b)。

(46) a. All the children was crying in the truck.

b. All the information was collected and analyzed.

また語順によりどちらのタイプになるかの傾向がある。all が名詞に先行する場合(以下 all 先行型)は type [F A])に、名詞に後続する場合(以下 all 後続型)は type [F A])になる傾向がある。そのため(47)のように成員を列挙するとき、成員個々(推移元(type F))に焦点があたるため、all 先行型は非文で、all 後続型のみ適格となる。また列挙せずとも個別性が強い場合も同様で、(48)で

は guests が集団で同時に到着しはじめることは通常ありえない。よって推移元に重きを置く意味となり、all 後続型のみ適格となる。((47)(48)は Carden 1970: 180, 187)。

(47) a. Tom, Dick, and Harry all left.                      b. \*All Tom, Dick, and Harry left.

(48) a. The guests all began to arrive.                      b. \*All the guests began to arrive.

しかし all 後続型であっても、Dougherty (1970: 870) が述べるように個別性を表す語句 alone などとは共起できない。あくまで type A への推移を前提とするからである。

(49) \*John, Bill, and Tom all met alone in New York.

#### 4.2 Half

Half は、type E/F/A から type C に推移するものに付加する。言い換えれば、binary type [ type C ] への推移を要件とし、推移した後でどちらかの成員に焦点があたる。そのため推移なしの type C には直接付加しない。というのも type C から type C への推移はないからである。

まず type E からの推移では、各成員(本来であれば分割不可)を type C へと推移させ、半分であることを示す(50)。type F からの推移では、type C へと推移することで複数成員の数が半分になることを示す(51)。type A からの推移では、境界が明確なものの分量が半分であることを type C へと推移することで示す(52)。

(50) Half of the table was concealed by a column. (Berry 1997: 69)

(51) Nearly half of the women lived in one suburban area of Kobe.

(52) The other half of the truth should not be overlooked.

type C へ推移するためには、推移元の境界をはっきりしている必要がある。言い換えれば推移もとはゲシュタルトでなければならない。そうでなければ binary に分割できないからである。このゲシュタルト性は、half の位置によって違いがでてくる。Half が predeterminer の場合、元となるものだけがゲシュタルトであればいいが、half が postdeterminer の場合、半分になった方もゲシュタルトであることが要求される。(53a)では bottle はゲシュタルトであるが、bottle 半分の量は単に量を表しているだけで、そこにはゲシュタルト性はない。一方(53b)では、ハーフボトルという確立された単位として存在している。そのためゲシュタルト性が存在している。

(53) a. I must have had at least half a bottle of wine with the meal.

b. He had drunk a half bottle of vodka that morning. (Berry 1997: 70-71)

ちなみに half は完全に半分でなくてもいい場合がある。(54)のような例がそれで、部分的な、不完全なという意味を持っており、必ずしもちょうど半分というわけではない。また(55)のようにここから副詞の意味も派生している。

(54) half measures, half knowledge, a half smile

(55) Well begun is half done.

#### 4.3 Either, neither

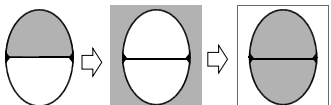
either も neither も type C に関わる限定詞になる。either は推移なしで type C に付加する。本来は type C にならない名詞であっても、either がつくことで type C とみなされる。そしてどちらかの成員に焦点があたる。either + 単数名詞であれば、単数名詞は前景化された成員であるし(56a) either

of 複数名詞であれば、複数名詞は type C の全体を指す(56b)。また選ばれる成員が定まっていない場合 each と同様で、交互に他成員が選ばれ、結果として全成員を表すことがある(57)。

- (56) a. Either part may be taken first at the option of the candidate.  
b. Go into either of the small rooms.

(57) I checked the rooms on either side. (Berry 1997: 140)

一方 neither においては type [ 'C A ] の推移がおこる。either 同様、neither が付加することで type C とみなされる。neither + 単数名詞、neither of 複数名詞の使い分けも either と同じになる。ただし neither の場合、type C から A への推移がおこる。つまり成員 2 つ(全体)に一度焦点があたる。ここまでは both と同じ過程を踏むが、both と異なり否定の意味が neither にはある。そのため推移した後、図地反転がおこる。図地反転することで命題が真とならないことを示す。図示したものが(58)になる。推移であるため、type A になった時でさえ、成員は 2 つのままになる(真ん中の図)。

- (58) type C      type A      図地反転      (59) a. Neither side wanted to claim her.  
b. Neither of the men heard the sound of footsteps.
- 

数の呼応は type A に重点があるため基本単数扱いであるが、type A を保持しつつも type C ((58)の真ん中の図) が強く想起されれば複数呼応となる。

- (60) a. Neither group are murderers.      b. Neither pair are especially thin.  
ちなみに either, neither どちらも代名詞の用法もあるし、名詞以外にも付加する。

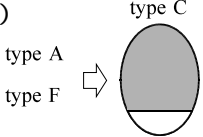
#### 4.4 Some

some は否定の作用域に関して any や many との対比で数多く論じられてきたが、ここでは比率的数量詞・基数的数量詞の観点もまじえながら、カテゴリタイプについて考察したい。

some は定冠詞と同様、切り離しの some と対比の some がある。切り離しの some は、母集合の全体を前提としない基数的数量詞に相当する。推移なしの type A/F に付加する。選ばれた成員( type F )または切り取られた部分( type A )が多くないことを表す。

- (61) a. He has some money on hand, doesn't he? ( type A )  
b. Some ideas are not easy to put into words. ( type F )

一方対比の some には 2 種類ある。一つめの対比 some は母集合の全体を前提とする比率的数量詞に相当する。母集合の中で多くない部分を占めることを表す。推移ありの type [ A/F C ] に付加する。つまりカテゴリを二分し、母集合の少ない一部に焦点をあて、他の部分を背景化する(62)。4.2 節で示したように、type C であるからといって 2 つの成員は同じ分量である必要はない。some の場合、少ない部分を持つ方に焦点があたる。

- (62)      type C      (63) a. Some of the water from the larger beaker was poured into  
another empty vessel.      ( type [ A C ] )  
type A      b. Some people at the party did ate only chicken. ( type [ F C ] )  
type F      対比の some の二つめは、推移ありの type A/E D に付加する。
- 

抽象名詞や普通名詞などに付加し、カテゴリー内で prominent な成員または属性に焦点があたる。ここでも他の成員や属性と対比がおこっている。

(64) a. Quite some skill is necessary to succeed in the country. ( type [ A D ] )

b. That was quite some party. ( type [ E D ] )

## 5. まとめ

本稿では名詞と限定詞の関係をカテゴリータイプの観点から考察した。カテゴリータイプは主観的なものであるが、その主観性は深く名詞と限定詞に関わっている。単にどのカテゴリータイプをとるかという共起制限だけでなく、限定詞から名詞の見方さえも変えることさえあることを見てきた。本稿で扱わなかった数量詞は別紙にゆずることとしたい。最後にまとめとして以下に一覧表を示す。

表 1

		分類・推移	type	補足	
冠詞	a/an	推移なし	C, E		
		推移あり	E が起点	'E A	総称 1
	E が着点		A/D/G E		
	the	切り離し	推移なし	A, B, E, F	
			推移あり	A F	
				F A	F 'A, 'F A の 2 種
				F/E/B G	固有名詞 1
		対比	推移なし	E G	固有名詞 2
				C, D	
				A E/F	
			推移あり	E/G A	
				A/E/G D	
				F A	総称 2
	切り離し / 対比	推移あり	E G	固有名詞 4	
			F E	総称 3	
ゼロ冠詞	推移なし		F E	固有名詞 5	
			G	固有名詞 6	
	推移あり	G が着点	A	総称 4	
			E G	固有名詞 3	
			E/'F/G A		
数量詞	both	推移あり	'F A	総称 5	
			G A		
	each	推移なし		C A	
				C, E	
	every	推移なし		E	
				推移あり	'E A
	all	推移あり		F 'A	
				'F A	
	half	推移あり		E/F/A C	
	either	推移なし		C	
neither	推移あり		'C A		
some	切り離し	推移なし	A, F		
	対比	推移あり	A/F C		
A/E D					

## 注

- \* 1 7種類のカテゴリータイプとその推移については緒方(2010)を発展させたものとなる。
- \* 2 限定詞は3つまで連続して用いられるが、ここでは単体の使用を基本考察していく。
- \* 3 本稿で扱わない限定詞も、すべて同じようにカテゴリータイプの考え方を適用できると考える。
- \* 4 緒方(2010)では、可算名詞は multinary non-scaling type とした。しかし本稿では type C が加わったため、可算名詞は multinary non-scaling type( type E, F)と binary type( type C)と修正する。
- \* 5 緒方(2010 . p . 7 )の図と形が異なるが、binary type [ type C ] が加わった以外同じである。
- \* 6 緒方(2010 . p . 9 )では type [ A D ] と考えていたが、本稿の分析へと修正する。
- \* 7 この場合そこに一つしかないものであっても、type B からの推移ではなく、type E からの推移とみなす。というも切り離しの the は、あくまで普通名詞のカテゴリーの中から一つを切り離して固有名詞化しているからである。
- \* 8 同じ対象であっても Oxford University, Lake Como などのように、切り離しの the が付加しない場合がある。これはすぐ下の固有名詞3のところでも論じる。
- \* 9 緒方(2010)では type [ A G ] と考えていたが、このように修正する。
- \* 10 緒方(2010)では、(31)のような例は type [ B G ] の推移と考えたが、本稿のように修正する。
- \* 11 every はあらゆる限りのという強調の意味で、type A に付加するがここでは含めない。
- \* 12 ただし everyone など単語においては、type A が優先される解釈が可能となる。
- \* 13 all もまた every 同様3つ以上の成員のカテゴリータイプに付加する。そのため binary の type C に付加することはない。
  - i ) \*The girl held a book in all her hands. (Aldridge 1982: 215)

## 参考文献

- Aldridge, M. V. 1982. *English quantifiers: A study of quantifying expressions in linguistic science and modern English usage*. Amersham: Avebury.
- Berry, R. 1993. *Articles*. London: HarperCollins
- Carden, G. 1970. "The Deep Structure of *Both*," *CLS* 6:178-189.
- Dougherty, R. C. 1970. "A Grammar of Coördinate Conjoined Structures: I," *Language* 46: 850-898.
- Hewson, J. 1972. *Article and noun in English*. The Hague: Mouton.
- 広瀬幸生・加賀信広 . 1997 . 『指示と照応と否定』東京：研究社 .
- 池内正幸 . 1985 . 『名詞句の限定表現』(新英文法選書第6巻)東京：大修館書店 .
- 久野暉・高見健一 . 2009 . 『謎解きの英文法 単数が複数か』東京：くろしお出版 .
- Milsark, G. 1974. *Existential Sentences in English*. Ph. D. Dissertation, MIT.
- 緒方隆文 . 2010 . 「名詞とカテゴリー - 可算・不可算・数の一致」『年報』第21号 . 1 15 . 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部人間文化研究所
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 斎藤秀三郎原著、松田福松訳編 . 1956 . 『名詞用法詳解』東京：吾妻書房 .
- 正保富三 . 1996 . 『英語の冠詞がわかる本』東京：研究社出版
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)